

保育士におけるパネルシアターおよびエプロンシアターの 実践について

熊 田 武 司

As for the practice of the panel theater and the apron theater in the nursery teacher

Takeshi Kumada

Summary

A small child shows keen interest in a puppet play. This is considered to be because it is similar to a real kind of life experience, in which a small child personifies the puppet, does imaginative identification, and can experience the world of the tale that is being told. Therefore, it is possible that a puppet play not only supports the power of appreciation and the creativity of the theater, but it is also a synthetic experience which can expand ones life experience.

The panel theater and the apron theater can be considered a kind of puppet show. The panel theater and the apron theater can be performed more easily than the puppet show. Therefore, it was expected that it would be practiced a lot in child care. However, the practice frequency was less with less the conversation than used in a puppet show with the story and the puppet.

It is necessary for the nursery teacher to consider why puppets are not being used in their school, and to emphasize the puppet show as a teaching material for child care, and to analyze its relationship to the result of this investigation. Future tasks are to clarify at what position a modern puppet show should be introduced in child care, and to examine whether the puppet show can be successfully implemented in child care.

Key words : a puppet show, a panel theater, an apron theater, Childcare teaching materials

I はじめに

「保育士における人形劇の実践について（Ⅰ）」（熊田, 2009）の中で、岐阜市内の保育所における人形劇の実践として行われているストーリーのある人形劇および人形を使っての対話の実践状況を明らかにした。その結果、ストーリーのある人形劇および人形を使っての対話の実践は、いずれも非常に少ないことが明らかになった。実践回数が少ない原因は、練習時間が確保されないことや人形劇をするための仲間が確保されないことなどが考えられる。

幼児は、人形劇に対して非常に興味を示す。これは、幼児が人形を擬人化し、想像的同一化をして物語の世界に入り込むといった経験をしながら、一種の生活経験をしているからであると考えられる。したがって、人形劇は、演劇の鑑賞力や創造力を養うだけでなく、生活経験を拡大す

ることのできる総合的経験であると考えることができる。その中で、パネルシアターおよびエプロンシアターは、手軽に演じることのできる人形劇の一つであると考えられる。

パネルシアターは、パネル布（フランネル）を貼った舞台に、Pペーパー（不織布）に絵を描いて切り取った絵人形を貼ったり、外したりしてお話や歌あそび、ゲームなどを展開する表現的保育教材である。これは、1973年に古宇田亮順によって創案され、保育園、幼稚園、小学校などの保育・教育現場を中心に実演が広まったのである。

パネルシアターは一人で演じることができ、演じ手は子ども達の反応や表情を確かめながら演じることができるものである。また、子どもはパネルで演じられている内容と演じ手とを同時に見ることとなり、演じ手の人間性に触れながら歌やお話の世界に入り込むのである。したがって、演じ手と子ども達はパネルを介してお互いに面白さ、楽しさを共有し、一体感を感じることができるのである。

吉田博子らは、「幼児教育における児童文化」（吉田.2007）の中で、パネルシアターの特徴を（i）日常的な活動のひとつとして位置付けられている。（ii）午前の遊びや行事のプログラムとして活用される機会が多い。と述べている。また、短期大学の保育者養成課程に在籍する学生を対象とした調査結果として、学生が実習した保育園において53%が日常の保育にパネルシアターを取り入れていることが報告されている。

エプロンシアターは、中谷真弓が1977年に考案し、1979年に保育雑誌に発表したものであり、胸当式エプロンを身に付けた演じ手が物語を語りながら、それに合わせてポケットから人形を取り出し、エプロンに貼り付けて演じるものである。人形とエプロンには、マジックテープが付けられ、人形を容易に付けたり、外したりできるようにしたものである。また、物語の背景をエプロンに縫いつけ、さらに切り込みや隠しポケットなど、様々な仕掛けを作り、物語に視覚的効果を与えることができるように工夫されたものである。

中谷真弓は、「幼児教育におけるエプロンシアターの意義」（中谷.1989）の中で、エプロンシアターを人形劇に喩えるなら、エプロンが舞台になっているのである。言い替えると、演じ手の体が舞台であり、それ故に、見る側の子どもは、瞬時に演じ手と一体になり、物語の世界に浸ることができる。人形劇のような無機的な舞台の場合には、観客と演じ手との繋がりを得るまでに、かなり高度な話術やテクニックを要するのに対して、エプロンシアターでは、演じ手と観客の信頼と愛着関係が醸し出す雰囲気、演じ手の不備な点をも補って、物語の世界を共有することができる。また、現在、幼稚園、保育園はもとより、障害児教育、家庭教育等の場でも広くエプロンシアターが活用され、新たな発展が見られるのは、エプロンという身近な素材と誰でも工夫して作ることができ、演じた時、多少の拙さをもカバーしてくれるだけのものがあり、誰もが物語の世界を展開することができる為と考えられる。と述べている。

このようにパネルシアターおよびエプロンシアターは、ストーリーのある人形劇や人形を使った対話とは違い、一人で容易に演じることができるため、日常保育に多く取り入れられていると予想することができる。

本研究においては、パネルシアターおよびエプロンシアターに焦点を絞り、これらが保育の中でどのような位置にあるのかを明らかにしたい。

そこで、保育所において、一年間にパネルシアターおよびエプロンシアターが日常保育・特別活動の中で、どのように保育士によって実践されたのかを調査する。そして、パネルシアターおよびエプロンシアターの実践回数について考察するものである。

II 調査方法

1 対象

岐阜市内の認可保育所（園）である公立保育所32園・私立保育園16園、合計48園に勤務する保育士（正規職員、嘱託職員、臨時職員）694人を対象とした。

2 方法

岐阜市保育事業室の許可を得て、平成20年3月5日に保育事業室から各保育所（園）長をとおして保育士に調査用紙「保育士における人形劇等の実践に関する調査」を配布し、保育事業室をとおして3月17日に回収した。

3 内容

“平成19年度一年間の保育士における人形劇等の実践について”という調査において、パネルシアターおよびエプロンシアターについての調査を行った。

- (1) 対象者の属性について（2項目）
- (2) ストーリーのある人形劇について（8項目）
- (3) 人形を使つての対話について（6項目）
- (4) パネルシアターについて（6項目）
- (5) エプロンシアターについて（6項目）

以上のうち、今回は(4)(5)の調査結果を使用し、パネルシアターおよびエプロンシアターの実践回数について考察するものとした。

III 結果

1 対象者の属性について

調査対象者694人に対して、有効回答数は616人（有効回収率88.8%）であった。

回答者の勤続年数は、1年目50人（8.1%）、2年目43人（7.0%）、3年目57人（9.3%）、4年目～10年目202人（32.8%）、11年目～20年目97人（15.7%）、21年目～30年目96人（15.6%）、31年目以上71人（11.5%）であった。

岐阜市においては、勤続10年目以下の保育士が57.2%と、全体の半数以上をしめている。

回答者の担当クラスは、所長・園長22人（3.6%）、0歳児60人（9.7%）、1歳児118人（19.2%）、2歳児116人（18.8%）、3歳児76人（12.3%）、4歳児57人（9.3%）、5歳児58人（9.4%）、フリー109人（17.7%）であった。

岐阜市においては、3歳以上児クラスの担当者が31.0%であるのに対し、3歳未満児クラスの担当者が47.7%と全体のほぼ半数を占めていた。（熊田. 2009）

2 パネルシアターの実践回数について

(1) 全体の実践回数

全体のパネルシアター実践回数（図1）およびパネルシアター実践回数の割合（図2）から、一年間1回もパネルシアターを実践しなかったのは268人であり43.5%を占めている。また、1回・2回のみ保育士を含めると411人で66.7%であり、半数強の保育士がほとんどパネルシア

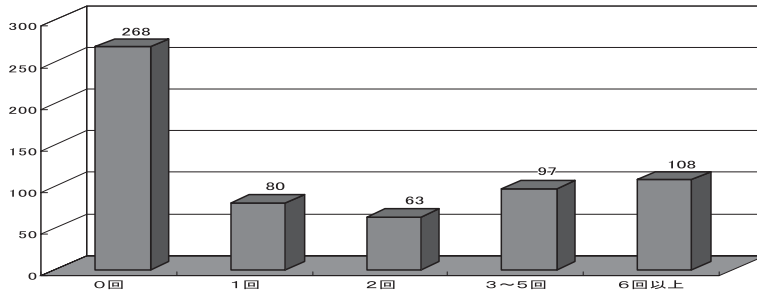


図1 パネルシアターの実践回数

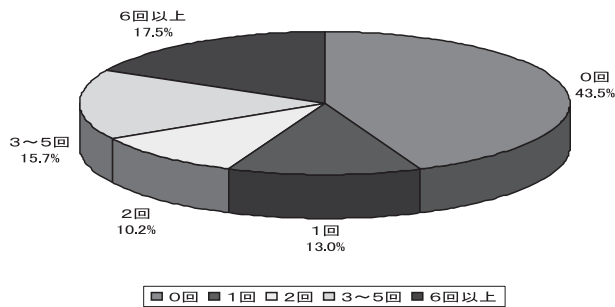


図2 パネルシアターの実践回数の割合

ターを実践していないことがわかる。しかし、6回以上パネルシアターを行った保育士は108人であり17.5%であった。

(2) 勤続年数と実践回数

勤続年数の違いによるパネルシアターの実践回数（図3）およびパネルシアター実践回数の割合（図4）から、1年目の保育士のうち72.0%（36人）がパネルシアターの実践回数が0回であり、90.0%がパネルシアターの実践回数が2回以下である。さらに、2年目、3年目の保育士も70.0%以上が2回以下である。また、すべての年代において、実践回数2回以下という保育士が

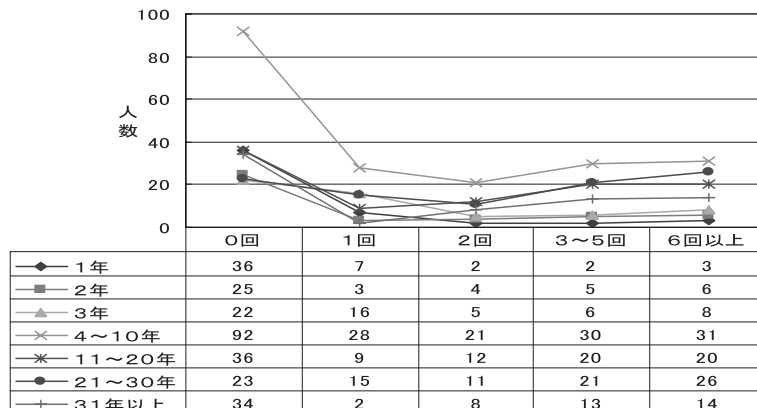


図3 勤続年数とパネルシアター実践回数

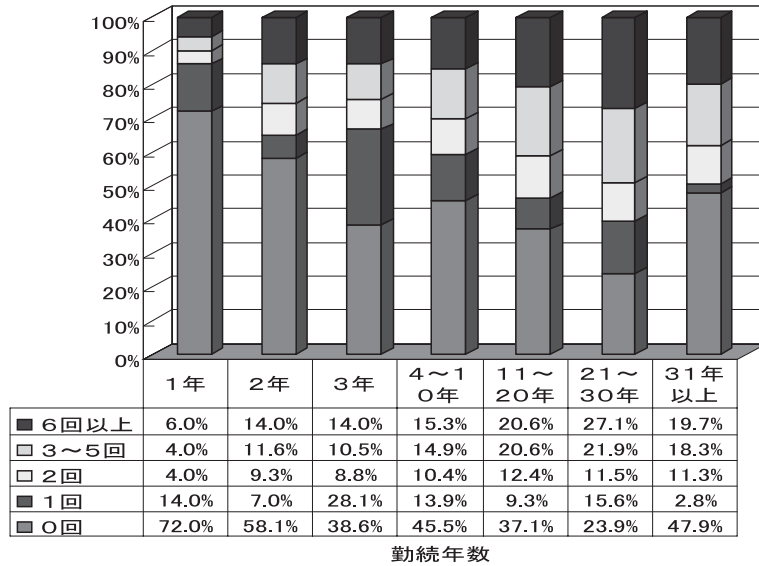


図4 勤続年数とパネルシアター実践回数の割合

約半数以上を占めている。

しかし、11年目以上の保育士は、40.0%以上が3回以上パネルシアターの実践を行っており、特に21～30年の保育士では、27.1%の保育士が6回以上パネルシアターの実践を行っている。

(3) 担当クラスと実践回数

担当クラスとパネルシアターの実践回数(図5)およびパネルシアター実践回数の割合(図6)から、0歳児クラスの保育士のうち60.0%(36人)がパネルシアターの実践が0回であることがわかる。さらに、1歳児クラス担当・フリーの保育士の55.0%以上が、パネルシアターの実践回数が0回である。それに対して、2歳児クラス・4歳児クラス担当では、6回以上パネルシアターの実践をしている保育士が、24.0%以上存在する。

所長・園長においては、77.3%がパネルシアターの実践回数が0回である。

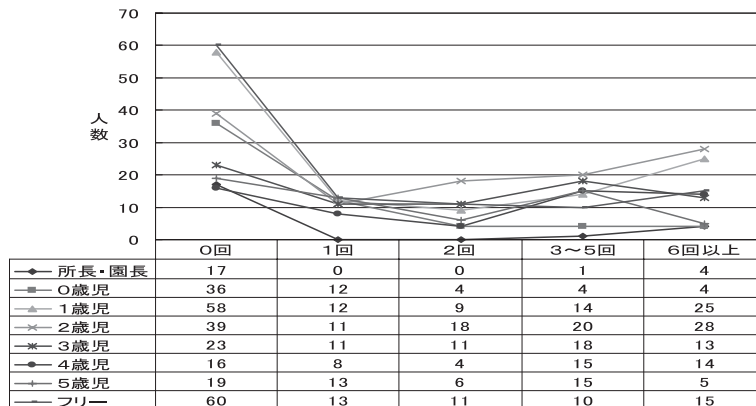


図5 担当クラスとパネルシアター実践回数

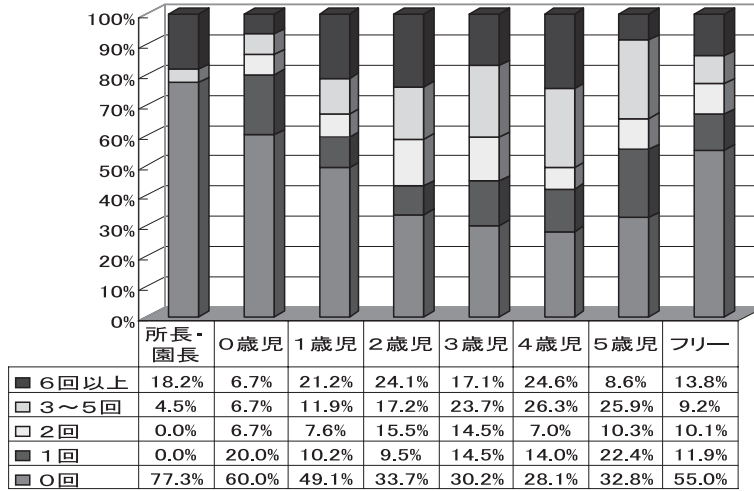


図6 担当クラスとパネルシアター実践回数の割合

(4) パネルシアターを演じた場面 (図7)

この1年間に、保育士がパネルシアターを日常保育の中で演じたのは39.1%であった。次に演じる機会が多かったのは誕生会の35.5%である。その他の各種行事で演じたものを加えると、パネルシアターを演じる機会も、ストーリーのある人形劇と同様に60.0%以上が何らかの行事、すなわち特別な保育の場面である。

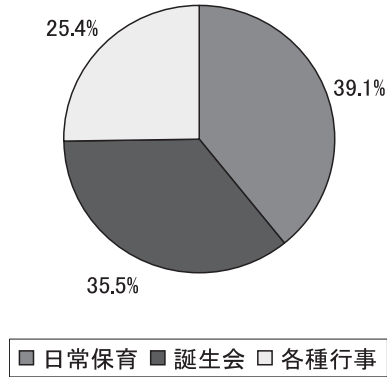


図7 パネルシアターを演じた場面

3 エプロンシアターの実践回数について

(1) 全体の実践回数

全体のエプロンシアター実践回数 (図8) およびエプロンシアター実践回数の割合 (図9) から、一年間1回もエプロンシアターを実践しなかったのは325人であり52.8%を占めている。また、1回・2回をみの保育士を含めると456人で74.0%であり、保育士がエプロンシアターをほとんど実践していないことがわかる。さらに、6回以上人形劇を行った保育士も76人と少なく、12.3%であった。

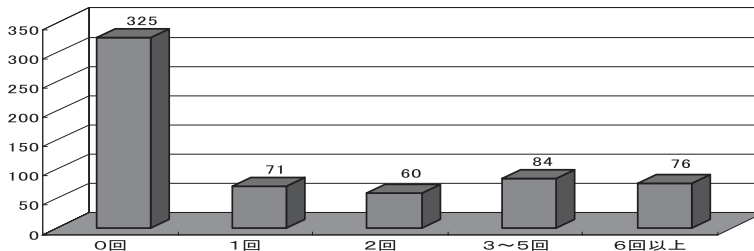


図8 エプロンシアターの実践回数

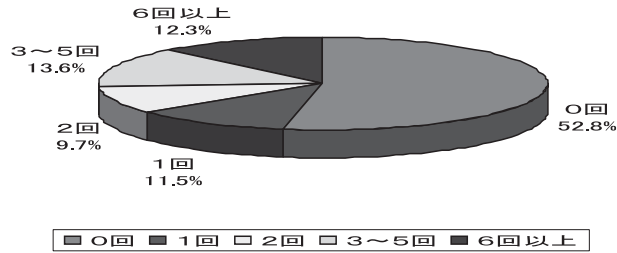


図9 エプロンシアター実践回数の割合

(2) 勤続年数と実践回数

勤続年数の違いによるエプロンシアターの実践回数（図10）およびエプロンシアター実践回数の割合（図11）から、勤続1年目の保育士のうち76.0%（38人）がエプロンシアターの実践回数

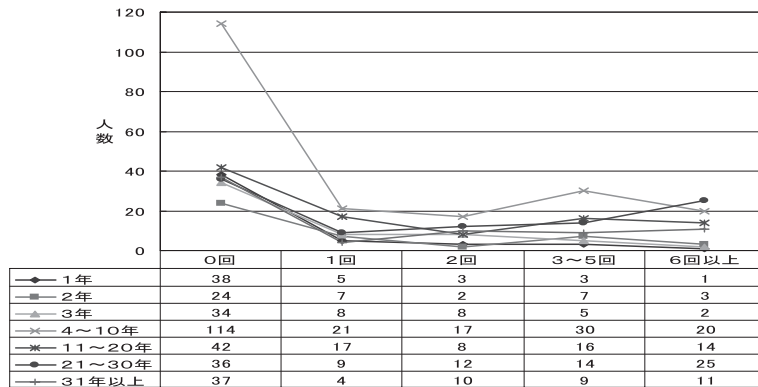


図10 勤続年数とエプロンシアター

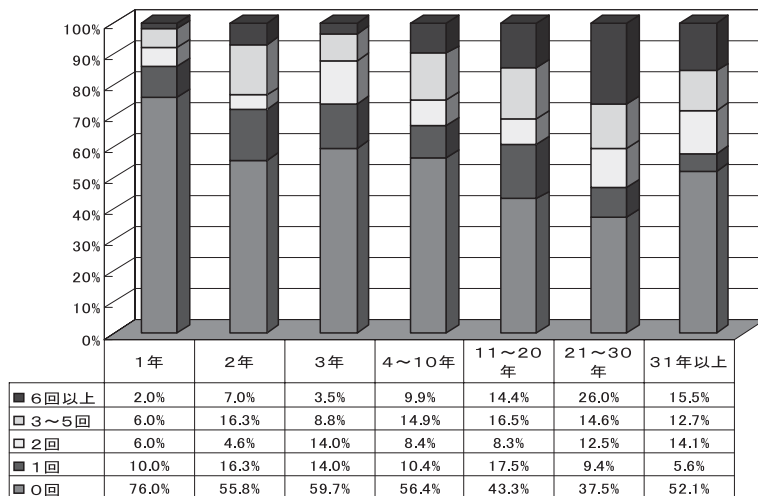


図11 勤続年数とエプロンシアター実践回数の割合

が0回であり、92.0%がエプロンシアターの実践回数が2回以下である。さらに、10年以下の保育士も半数以上が実践回数0回である。また、70.0%以上が実践2回以下である。

しかし、11年目以上の保育士は、30.0%以上が3回以上エプロンシアターの実践を行っており、特に21～30年の保育士では、26.0%の保育士が6回以上エプロンシアターの実践を行っている。

(3) 担当クラスと実践回数

担当クラスとエプロンシアター実践回数（図12）およびエプロンシアター実践回数の割合（図13）から、0歳児クラスの保育士の42人70.0%がエプロンシアターの実践が0回である。さらに、5歳児クラス担当・フリーの保育士の約60.0%も、エプロンシアターの実践回数が0回である。それに対して、1歳児クラス・2歳児クラス3歳児クラス担当では、3回以上エプロンシアターの実践をしている保育士が、30.0%以上存在する。

所長・園長においては、72.7%がエプロンシアターの実践回数が0回であるが、実践回数6回

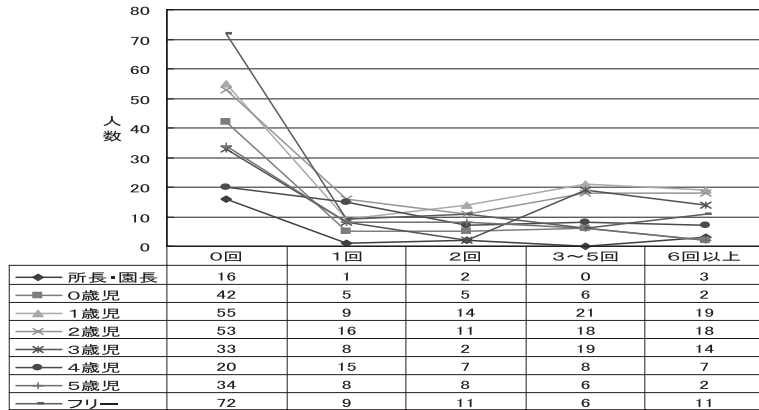


図12 担当クラスとエプロンシアター実践回数

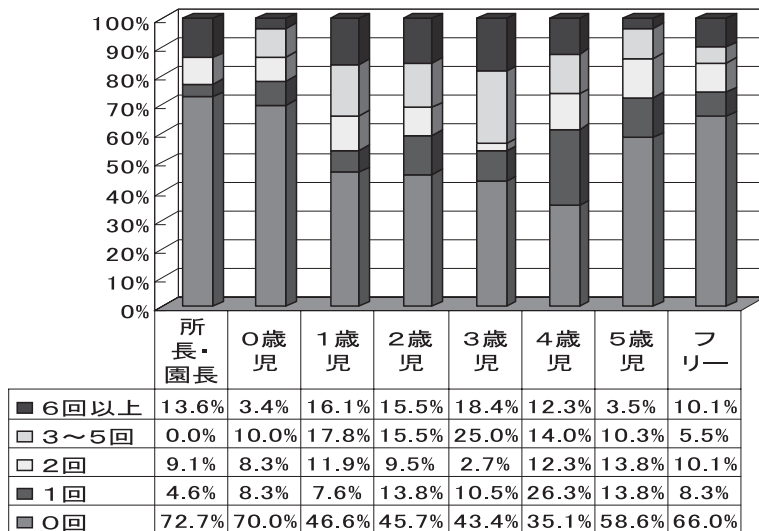


図13 担当クラスとエプロンシアター実践回数の割合

以上も13.6%存在する。

(4) エプロンシアターを演じた場面 (図14)

保育士がエプロンシアターを演じた場面は、日常保育の中での場面が多く、全体の69.7%である。誕生会においてエプロンシアターを演じた機会は少なく、16.3%である。

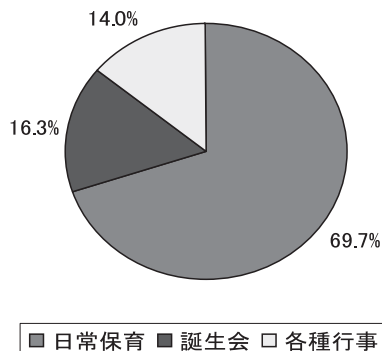


図14 エプロンシアターを演じた場面

IV 考察

1 パネルシアターの実践について

全体としては、全くパネルシアターを実践していない保育士は43.5%であり、実践回数が1回2

回という保育士を含めると66.7%であることから、パネルシアターも人形劇と同様に、保育所において保育の中で演じられることは非常に少ないということが今回の調査によって明らかになった。

パネルシアターは、39.1%の保育士が日常保育の中で演じてはいるが、やはり人形劇と同様に、誕生会やその他の行事など特別な保育の場面において実践されていることが多いということが明らかになった。また、そのパネルシアターは、「こぶたのポンくん」「猫のお医者さん」「すてきな帽子屋さん」などのミュージックパネル(増田裕子, 1991, 1998)や「とんでったバナナ」「ドレミのうた」「こぶたぬきつねこ」などの歌、「はらぺこあおむし」「3匹やぎのガラガラドン」などの絵本、「織り姫と彦星」「節分」「ひなまつり」などの伝統行事を中心とするものが題材となっている。そして、話の内容を楽しむこと、季節や季節の行事に関心を持つこと、食育など生活習慣を学ぶことなどがパネルシアターを演じる目的となっている。

勤続年数とパネルシアター実践の関係については、調査結果から1年目の保育士は72.0%がパネルシアターを全く実践しておらず、実践回数2回以下を含めると1年目では90.0%、2年目3年目の保育士も70.0%以上が存在することが明らかになった。これは、3年目以下の保育士は、パネルシアターを所有していないことが要因ではないかと考えられる。それに対して、11年目以上の保育士は、40.0%以上が3回以上実践をしており、21年~30年の27.1%が6回以上実践していることが明らかになった。パネルシアターが普及し始めたのが約30年前であることから、パネルシアターを普及させるため、パネルシアターに関する研修会が行われたり、出版物が発行されたりした時期と重なっていることで、この年代の保育士は、パネルシアターを所有しているのではないかと推察できる。

担当クラスとパネルシアター実践の関係については、調査結果から全く実践していない保育士は、0歳児クラス担当では60.0%、1歳児クラス担当では49.1%存在することが明らかになった。これは、人形劇と同様に保育士が0歳児・1歳児は話をよく理解できないのではないかと判断していることが原因の一つではないかと考えられる。

2 エプロンシアターの実践について

全体としては、全くエプロンシアターを実践していない保育士は52.8%であり、実践回数が1回2回という保育士を含めると74.0%である。また、6回以上実践した保育士は、12.3%と少数であることから、エプロンシアターも人形劇やパネルシアターと同様に、保育所において保育の

中で演じられることは非常に少ないということが今回の調査によって明らかになった。

エプロンシアターは、日常保育の中で演じられていることが多く、69.7%の保育士が実践しているということが調査結果によって明らかになった。これは、エプロンシアターは保育者がエプロンを着用し、その上で演じるスタイルであるという特徴があるからだと考えられる。また、演じられているエプロンシアターは、「ジャックと豆の木」「大きなかぶ」「ピーマンマン」「お菓子の国の食いしん坊」など、市販されているものがほとんどである。そして、話の内容を楽しむこと、話に親しむこと、食育など生活習慣を学ぶこと、子ども達を集中させることなどがエプロンシアターを演じる目的となっている。

勤続年数とエプロンシアター実践の関係については、調査結果から1年目の保育士は76.0%がエプロンシアターを全く実践しておらず、実践回数2回以下を含めると1年目では92.0%、10年目以下の保育士も70.0%以上が存在することが明らかになった。これは、市販されている教材を使用していることが多いことから、10年目以下の保育士は、エプロンシアターを所有していないことが要因ではないかと考えられる。それに対して、11年目以上の保育士は、30.0%以上が3回以上実践をしており、21年～30年の26.0%が6回以上実践していることが明らかになった。これもパネルシアター同様、エプロンシアターが普及し始めた時期と重なっていると考えられる。

担当クラスとエプロンシアター実践の関係については、調査結果から全く実践していない保育士は、0歳児クラス担当では70.0%、5歳児クラス担当では58.6%存在することが明らかになった。また、3歳児クラス担当では43.4%、1歳2歳児クラス担当では30.0%以上が3回以上エプロンシアターの実践をしていることが明らかになった。

V 今後の課題

今回の分析によって、保育士におけるパネルシアターおよびエプロンシアターの実践回数の状況を把握することはできた。

「保育士における人形劇の実践について(Ⅰ)」(熊田, 2009) および本研究によって、人形劇(パネルシアターおよびエプロンシアターを含む)は、保育の中での実践が少ないという現状が明らかになった。

では、保育士はなぜ人形劇を実践することができないのか、人形劇を保育教材としてどのように捉えているのかなど、人形劇等の実践に対する保育士の意識調査を行い、今回の調査結果との関係を分析することが必要である。そして、現代人形劇が保育の中でどのような位置にあるのか明らかにし、人形劇を保育の中にどのように位置づけていくことができるのかを検討することが今後の課題である。

謝 辞

本研究にあたり、ご協力をいただいた岐阜市福祉部保育事業室(現 保育事業課) および岐阜市内保育所(園)に勤務する保育士の皆様に深謝いたします。

引用文献・参考文献

1. 久富陽子(編者) ; 2002、「実習に行くまえに知っておきたい保育実技—児童文化財の魅力とその活用・展開—」、萌文書林
2. 石垣恵美子・玉置哲淳(編著) ; 1993、「幼児教育課程論入門」、建帛社

3. 古宇田亮順・松家まきこ・藤田佳子；2009、「実習に役立つパネルシアターハンドブック」、萌文書林
4. 熊田武司；2009、「保育士における人形劇の実践について（Ⅰ）—岐阜市内の保育所（園）に勤務する保育士を対象にした調査から—」、『岐阜聖徳学園大学短期大学部紀要』第41集、pp87～99
5. 増田裕子1991、「増田裕子のミュージックパネル」、クレヨンハウス
6. 増田裕子1998、「増田裕子のミュージックパネル2」、クレヨンハウス
7. 森上史朗；1993、「子どもに生きた人・倉橋惣三—その生涯・思想・保育・教育—」、フレーベル館
8. 文部省；1979、「幼稚園教育百年史」、ひかりのくに
9. 中谷真弓；1989、「幼児教育におけるエプロンシアターの意義」、『武蔵野短期大学研究紀要』第4輯、pp135～144
10. 日本演劇教育連盟（編集）；1994、「新人形劇入門」、晩成書房
11. 吉田博子・藤田佳子；2007、「幼児教育における児童文化—実習保育所における児童文化の現状について—」、『淑徳短期大学研究紀要』第46号、pp131～143

